

アメリカの宗教と政治——テレビ伝道の台頭とそのゆくえ

武田 道生

わが国では、一九八七年以来、NHKが衛星放送を開始した。民間ではJSBが映画やスポーツを中心とした番組編成のWOWOW局を開始し、現在では百万を越える世帯が契約している。NHKの方はその数倍にも上っている。もっともこのバブル崩壊後の不景気でWOWOWは、思ったより契約数が延びず青息吐息のようであるが。

民間では株式会社日本通信が大型衛星を打ち上げ、中継器をリースする事業を開始している。これに大いに関心を示している宗教団体は多い。現在のところ、日本電信電話（NTT）の衛星ビデオ通信サービスを利用して中継を行っている企業は多く、各地の支社間でスクリーンや巨大プロジェクトで会議や情報のやり取りを行っているといわれる。またこの効果を一番有効利用しているのは教育産業ではなからうか。例えば、大手予備校の河合塾は、全国のブランチ校に人気教師の授業を同時中継する「サテライト授業・遠隔講義システム孫悟空プロ」を開始している。⁽¹⁾

代々木ゼミナールも同様だし、さらには、こうした予備校の授業を地方の私立学校などが正規の授業として取入れているのが現状である。

テレビ伝道の台頭とそのゆくえ

宗教団体では、特に阿含宗が熱心で、一九八七年春には東京三田の関東別院の落慶法要を放送衛星を使って北海道本部と九州支部に設置した巨大なスクリーンで同時中継した。以来、毎月一回、桐山靖雄管長が導師をつとめる朔日縁起宝生護摩を各地の支部に中継している。特に、本部聖地の京都花山で毎年二月一日に行う最大の行事「宝生・解脱大柴灯護摩供（ほうしょう・げだつだいいさいとうごまく）」（通称阿含星まつり）の一九八八年のセールス・ポイントが、衛星同時中継で、京都に行かずに全国二〇カ所の支部でいながらに見られるというものであった。もっともこのアイデアは本部に出かける信者が激減したこともあって以後行われていない。この教団は、責任者を後述するテレビ伝道の視察にアメリカに派遣したほど、その導入には熱心である。これに続いたのが真如苑で、一九八七年秋、山梨県河口湖畔にある真如苑総本部真澄寺の別院柴燈護摩道場の落慶法要を中継した。こうした、俗に第三次宗教ブームと呼ばれる現象の中心的存在である密教系の新宗教が、科学テクノロジーの最先端のメディアを使った布教に関心を持っていることは、大変興味深いものがある。また、伝統仏教の浄土宗も将来のこととはいえ、通信衛星を用いた

布教活動の可能性を検討し始めている。

しかしながら、現在のところ阿含宗以外の各教団はまだ実際には衛星通信テレビ伝道を恒常的に行っているわけでもない。阿含宗にしても現在の方法は中途半端で、受信設備のある地区支部まで行かなければ見られないわけで、アメリカのように自宅ですら、ポテトチップスを食べながら見るような視聴を表す「カウチ・ポテト」視聴への道は遠い。これには、日本とアメリカの放送倫理基準の違いと言う枷があることにも原因があることは後述する。どちらにしても、これから紹介するアメリカで花盛りのテレビ伝道という特殊な世界から〈布教媒体としての通信衛星〉というアイデアだけをいただいて来たわけだが、実際には、テレビ伝道の意味や教団とテレビ伝道のあり方が、アメリカでは全く独自の展開を遂げて現在の繁栄を見ているのである。

一般にテレビを用いて行う布教をテレビ伝道ないしはテレビ教会、その伝道師をテレヴァンジュリスト（テレビ福音伝道師を意味する造語）あるいはテレビ伝道師と呼ぶが、これらはいってみれば、個人のカリスマ的魅力によって巨大な宗教企業を造り上げたものを言う。これ以外に日本の教団の様に既に巨大化した、デノミネーションと呼ばれる教派の南部バプテスト教会やカトリック教会が独自の宗教放送局を持って番組を制作放映しているところも出てはいるが、一介の伝道師がブラウン管を通じた魅力によって寄付を得て、放送する局を増やして、電波によって巨大教会を形成していくところに、アメリカのテレビ伝道という宗教の独自性が見られるのである。

なおアメリカのテレビ伝道の総合的研究とその紹介は、生駒孝

彰氏の著作によってなされている。

本稿では、こうして独自に発展して、最近まで隆盛を極めたアメリカのテレビ伝道の台頭の歴史とその文化的背景、最近の凋落とその経緯、さらに民主党クリントン大統領政権の誕生と彼らへの影響と将来の展望についての問題点を、いくつかの最近の事件を追うことによって考察してみたい。

一 テレテレビ伝道師の誕生とその歴史的背景

アメリカの建国の歴史は、そのはじまりから宗教的なものであったことは周知の事実である。ヨーロッパでの宗教的迫害を逃れた、最近の表現で言えば宗教難民が神の理想国家を新大陸の地上に建国することを目指していたのである。西部開拓のフロンティアは彼らに広大な土地を与えたが、あまりにも過疎で広大な開拓地には、教会も神の言葉である福音を伝える伝道師も全く足りなかった。こうした状況で福音に飢えた開拓者にとって、それまでの彼らの属していた教派ではなくとも、それぞれの教派の教えに抵触しないキリスト教に共通する救いや神の愛といった福音を説く福音伝道師が受け容れられてきたのである。伝道師たちは各地を巡回しながら、集会場やテントで集会を行い福音を伝え続けた。数千人を集めて熱狂的な信仰覚醒運動や福音伝道師の祈りや患部に触れて病氣治しをする癒しによって、熱狂的な支持を得て人気伝道師たちが誕生してきたのである。これは一九二〇年代に入ってからラジオ伝道が始まって、直接的な伝道師との触れ合いに救いを求める熱狂のなかでずっと長い間人気を保ち続けた。

五〇年代の急速なテレビの普及と共に本格的なテレビ伝道が始

まった。それは、依然としてラジオ伝道の域を出ない、例えば、プロテスタント各派、カトリック、ユダヤ教といった既成大教派であるデノミネーション各派による全米ネットの宗教番組だった。六〇年代後半になると、自由な活動が許される教派から叙階だけ受けて資格を得た一匹狼的な伝道師の番組が増加した。七〇年代になると、さらにこの傾向は著しいものとなり、いわゆるテレビアンジェリスト（テレビ福音伝道師）という言葉が一般的になるほど、彼らの番組が、個人的な魅力によって視聴者を魅了し、教会や放送局を運営する、全く歴史上類を見ない宗教が誕生したのである。

二 テレビ伝道の隆盛とその文化的背景

こうした隆盛の直接的な要因として、民主党大統領にして史上初のプロテスタントではないカトリックの大統領であるケネディ政権の誕生があげられる。ケネディは社会的少数派（マイノリティ）保護の政策を共和党や多くの反対を押し切って断行した。これは当時の良心的な社会風潮でもあった。これをうけて連邦通信委員会は宗教放送規定を変更して、連邦憲法の政教分離と宗教活動の自由の原則から、あらゆる宗教の平等な取扱と有料化を認めた。五〇年代までの宗教放送は公益性を重視しスポンサーなしの無料放送とされていたのに対して、スポンサー付きの有料放送を認めた。これによって宗教番組を増やす局が増加することになった。また視聴者への献金の訴えや物品（聖書、十字架等）の通信販売が許可されるようになった。こうして大衆の要求に敏感に応えた番組を組み、激しく他の教派などを攻撃するようなカリスマ

的魅力を持ったテレビアンジェリスト繁栄の直接的な起因ができたのであつたのである。

一方、彼らテレビ伝道師の台頭にさらに影響を与えたのは、アメリカの時代の背景であつたと思われる。彼らの急激な台頭は、六〇年代後半から七〇年代前半にかけての、ヴェトナム戦争に対するアメリカ国内の反戦運動と全国的な厭戦ムードに覆われた〈ヴェトナム戦争非聖戦観〉の芽生えと時を同じくしている。アメリカ建国の歴史上初めての聖戦と闘う精神的宗教的意味を失った長い泥沼の闘いの後の敗戦によって、それまでアメリカをささえてきたあらゆる価値の崩壊現象が起こつた。例えば、反戦を訴えた穏健な自由主義的教派不信、リベラルな民主党不信、神の正義の闘いのために力を行使する強いアメリカを象徴する教育・家庭の崩壊、経済的不況、ヴェトナム帰還兵問題、失業・犯罪の増加、麻薬問題などの社会、経済、道徳問題などが一気に噴出した。と同時に、急進的な新しい価値を求める運動が始まった。マティン・ルーサー・キング・ジュニアを先頭にした公民権運動、女性の権利の拡大を訴えるフェミニズム運動（当時の一般的な呼称は、ウーマン・リブ運動）などがそれである。以後、少数民族・人種差別的禁止を手始めに、男女の性差別的社会的禁止、妊娠中絶の合法化、ポルノの解禁、同性愛の社会的容認など、プロテスタントの神の国アメリカではこれまで考えられなかった、精神的倫理的宗教的価値の転換の大波がうねりとなって襲つてきた社会・政治・文化のあらゆる分野の価値の喪失、新しい価値の創造の時代が到来したのである。こうした極端なまでの改革による〈自由な真に人間的な〉アメリカは、多くの問題を抱えた。余り

にも急激な変化に、犯罪や失業、性的混乱やドラッグ問題、世代的対立などが多発した。当初は社会的価値の創造に積極的に関わってきた自由主義的プロテスタント諸派は、道徳的倫理的支柱を失った状況に不安と不満を抱く保守的な層を吸収できず信者は減少し続けた。政治的には、強いアメリカを待望する保守的な意見が再び台頭してきて、共和党に対する支持が始まった。ジョンソン以後の歴代大統領は自信をなくし、それはカーター大統領のイラン革命の際のパーレビ国王の扱いとイランアメリカ大使館の占拠で決定的に失望され尽くしてしまった。

このような自信を失った弱いアメリカを憂い危機感を持ったのは、保守的なプロテスタント諸派であった。特に七〇年代後半になって台頭してきたテレビ伝道師たちは、不満を抱える層を吸収し、彼らを代弁して社会攻撃を続けた。彼らは極めて保守的な政治発言を行ない社会改革を訴えた。一般に彼らはファンダメンタリスト・聖書根本主義者・福音派根本主義者と呼ばれる。彼らが強調したことは、アメリカを墜落させた同性愛・妊娠中絶・ポルノ・ドラッグの禁止、男女同権法・公民権法の廃止、共産主義に対する反対、公立学校における礼拝の推進などであった。彼らは保守アメリカの中心地で、パイブル・ベルトと呼ばれる南部諸州を本拠として、新しいメディアであるケーブル・テレビ、UHF局、さらには衛星通信を駆使して独自の伝道形態を發展させた。こうして激しい社会攻撃と神がかり的な癒しを行うカリスマを持つ伝道師の出現は、宗教テレビを爆発的に巨大化していった。

三 代表的なテレビ伝道師たち

番組内容

彼らのパフォーマンスは極めて似通っている。よく響きわたる声でプロの歌手顔負けの賛美歌や愛の歌を歌い、時にはピアノの弾き語りも行う。テレビ映りは重要な要素で、至福に満ちた表情を常に浮かべ、魅力を増すためにパーマをかけたたり美容整形を行っているものもある。彼らは激しく他の伝道師や宗教や進歩的な考えや政治を批判し、感情を高め、声を張り上げて神を讃え、感極まって泣くこともしばしばである。また、家族愛を強調するために、家族全員で登場し抱き合い腕を握りあい理想の家族を演じる。またなかには、病氣治しを得意とする者も多く、テレビ中継の会場に詰めかけた信者の中から癒しの奇跡を行う。そして番組の最後には「この番組は皆さんや視聴者の献金なくしては放送できなくなってしまう。どうぞ、私宛てに、個人小切手やクレジットカードで献金をお願いします。」と締め括るのである。さらに、豪華愛蔵版の特別聖書や特別デザインの十字架など、一般では手に入らないさまざまな宗教用品を通信販売したり、貧しい孤児への募金や施設建築の募金を募る。

政治的立場

政治的には極めて保守的で、共和党支持がほとんどである。社会的な保守階層の代弁者であるばかりでなく、その宗教的主張からも極端な右派である。彼らの宗教的立場は、神の言葉を伝える聖書の無謬性を絶対的に確信している。その教えは天啓史観と呼ばれる。それは、人類は神が分けた七つの歴史時代を生きるが、

その各時代に啓示を下し、そこにこの世の終末であるハルマゲドンがあり、この教えの信仰者だけが天国に移送され、キリストが再臨し悪魔に打ち勝つてその後至福の平和な千年間を迎えるというものである。これは、一般に千年至福主義（ミレニアリズム）と呼ばれるが、彼らは神が計画しているこの終末戦争が悪魔との戦いであり、核戦争によって神が勝利すると確信している。七〇年代、八〇年代を通じて中東で紛争が起こる度に、テレビを通じて彼らは、共產主義の象徴としてのソ連を悪魔として彼らへの最後の審判が下されることを予言した。以後彼らの矛先はイスラーム根本主義へと向けられている。グレース・ハルセルは、後述する極右派の伝道師ジェリー・ファルウェルなどがレーガン大統領の政策や思想に与えた影響についても詳しく言及している。

主な伝道師たち

彼らの生活は豪華そのものである。広大な邸宅をいくつも持ち、最高級のリムジンを乗り回している。彼らは、彼らの贅沢な生活は信者が求めているのだと公言して憚らない。彼らの豊かな生活は総て彼らの雄弁な才能や癒しのわざや視聴者を宗教的世界に導く個人的なカリスマ性に依っている。その資質への視聴者の献金や宗教グッズの購入、国家からの宗教法人税制優遇措置と宗教活動への政教分離による不介入によって、彼らの宗教王国は繁栄を極めていたのである。

ここでは主な伝道師たちの一九八九年当時の活動の実態を『タイム』と『ニューズウィーク』誌から見てみよう。

オーラル・ロバート 彼は六九歳の癒しを活動の中心に据えた伝道師である。彼は、早くも一九四〇年代から、手かざしによる

癒しの霊的な力を売り物にしていた。五〇年代からテント伝道とテレビ伝道を並行して行ってきた。現在、『オーラル・ロバートとあなた』という毎週一度の番組は、アービトロン調査によれば二一〇局で放映され、一一〇万の視聴者がいるが、この一〇年間で八〇万人減少している。献金額も同様で、一九八〇年の八八〇〇万ドルから五五〇〇ドルに下落している。国税局によれば、一貫して赤字を計上しているという。彼は、本部のオクラホマ州タルサに、学生数四五〇〇人のオーラル・ロバート大学と二億五〇〇〇万ドルかけて建設した病院「信仰の町」を経営している。

ジムとタミー・ペーカー夫妻 当時のPTLクラブの主宰者である。四七歳のジムと四五歳のタミーの作ったサウス・カロライナ州の「ヘリテージUSA」は、巨大な宗教リゾート施設で、施設内のコテージには生涯会員の優先使用権がある。後述するパット・ロバートソンの下でテレビ伝道を学び、一九七四年に独立し、PTLクラブ（Praise The Lord〈主を称えよ〉あるいはPeople That Love〈愛ある人々〉の略）とテレビ局を主宰し「PTLクラブ」という番組を始めた。PTLを後に触れるスキャンダルで辞任する前は、放送衛星チャンネルを所有して、一七八局をネットして、一三五〇万世帯に番組を送っていた。PTLの本部はノース・カロライナ州シャーロットにあり、申告では、一九八六年の年収は、一億二九〇〇万ドルに上っている。

ジェリー・ファルウェル 彼は五三歳で、〈戦間的な伝道師〉と呼ばれるほど、保守派の多い伝道師の中でも極め付けの政治的活動家であり、最も有名な影響力を持っている。新右派団体のモラル・マジオリティー、道徳的多数派（一九八六年にリパティイ・

フェデレーション、自由連合から改名)の創始者であるファルウェルは、この共和党支持の圧力団体を率いている。彼は、レーガン大統領のアドヴァイザーの地位にある。彼は、故郷のヴァージニア州リンチバーグにトーマス・ロード・バプテストチャーチを設立した。現在、年収一億三五〇〇万ドルを得て、二〇〇〇人の職員を擁するオールド・タイム・ゴスベル・アワー株式会社を主宰している。ここは、三五〇〇のテレビ局を介して、アービトロ調査によれば、五四万七〇〇〇家庭に、またリバイティー・ブロードキャスティング・ネットワークを通じて、一五〇万のケール・テレビ視聴者に向けて放送している。学生数七五〇〇〇人のリバイティー大学は、一九七一年に創設された。彼の宗教活動による一九八五年の収入は、七三三〇万ドルである。

ジミー・スワガート 彼は五二歳で、ピアノの弾き語りが得意なため、歌うクルセーダーと呼ばれている。他の伝道師と大きく異なるのは、南部ルイジアナなまりの陽気で狂信的といつてよいほどの熱狂的な語り口の、テレビで一番人気のある伝道師であることで、海外伝道と音楽的才能、魅きつけてやまないカリスマ的人格、他の教派への激しい攻撃である。最高裁判所と議会を「神によって呪われた機関」、カトリック教会を「偽ものの宗教」と非難している。ジミー・スワガート伝道本部は、ルイジアナ州バトンルーージュにあり、アービトロンによれば、彼の番組(ジミー・スワガート・アワー)は、二〇〇万以上の視聴者を確保している。国際的通信販売事業を含めて、一九八五年には年収一億四〇〇〇万ドルを得た。スワガート・ニュー・バイブル・カレッジは一九八四年に開校した。本部には、テレビ制作センターとレ

コード録音スタジオがあり、彼のレコードは、一五〇〇万枚以上売れている。

パット・ロバートソン 彼は、ヴァージニア州ヴァージニア・ビーチに本拠を構えるCBN(キリスト教放送網)センターの主宰者である。CBN放送局は、全米第五位のケール・テレビ局で、三三〇〇万世帯が契約している。ここは、二四時間放送を行っている。特に、主要番組の「七〇〇クラブ」は、二〇〇以上の局で毎日放送され、四六万八〇〇〇世帯が視聴している。CBNの八五年度の総収入は、一億二九〇〇ドルという。彼はテレビ伝道において、常に先駆的の位置にある。現在のテレビ伝道番組の主流であるヴァエティー番組形式を取り入れたのも彼が最初である。彼の血筋から二人の大統領が出ているが、彼も政治的野心は大いにあり、八八年のブッシュが大統領になった大統領選挙では、各党の候補者を決定する大統領予備選挙に出馬して、共和党候補第三位になっている。

こうした宗教活動以外で話題を集める伝道師とは別に、彼らに比べ地味にスキヤンダルもなく教会活動を行っている伝道師に、ロバート・シューラーやビリー・グラハムがいる。ロバート・シューラーの本拠地は、カリフォルニア州のデイズニールランドの近くにあり、総ガラス張りのクリスタル大聖堂はその象徴である。彼は、「積極的思考の力」を提唱し、その番組「アワー・オブ・パワー」の視聴世帯は一七〇万に及ぶ。

四 テレビ伝道師たちの挫折

一九八七年以来、相次いでテレビ伝道師たちの不祥事や挫折を

象徴する事件が起こっている。いずれもこの世界では、活動の規模といひ知名度といひ代表的な伝道師たちである。それだけに視聴者ばかりか一般にも大きな衝撃となり宗教界にもさらには政治的にも重要な社会的な問題とされた。

オーラル・ロバーツの必死の献金ショウ

前述したように彼の医療施設「信仰の町」は慢性的な資金と患者の欠乏状態にあり、年間三〇〇万ドルから四〇〇万ドルの赤字を計上している。彼は、これまでも落ち込む献金の増収を図ってきた。一九八〇年の「信仰の町」建設中には、彼のベッドのそばに、高さ九〇〇フィートのキリストが現れ、「私の訪れを」あなたの祈りの仲間に告げなさい。私が彼らに訴えて（信仰の町を）建てましょう。」と、語ったと発表した。お陰で建設資金は一挙に集まったのだった。

次いで、一九八七年一月、究極的な財政逼迫に陥った彼は窮状を視聴者に訴えた。「三月三十一日までに八〇〇万ドルの献金がなければ、彼は私を天国へ召される。」この宣言は、彼の信者ばかりでなく、興味本位のマスメディアの注目を一斉に浴びた。三月に入っても目標額に達せず、とうとう高さの六〇メートルの〈祈りの塔〉に登って断食すると彼が宣言したとき、彼の命を救ったのは、神ならぬフロリダのドッグ・レースの経営者の献金だった。こうした彼の三月にわたる〈命がけ〉の献金ショウは、幕を閉じた。この献金事件は、期日が迫るにつれて、テレビ、新聞で連日さかんにとりあげられた。しかし、その報道姿勢は、前回の九〇〇フィートのキリスト降臨に続き、冷笑的でショウを楽しんでいるようだった。

P T Lクラブの不倫と金銭スキヤンダル

テレビ伝道師のなかでも高い人気を持つジム・ベーカーとタミー・フェイ・ベーカー夫妻は、金と女性のスキヤンダルで、一九八七年四月にP T Lクラブの経営者の座を追われた。彼らを最初に非難したのはジミー・スワガートで、P T Lクラブの経営を引き受けたのは、ジェリー・ファルウェルという配役であった。新聞などでは、これを〈ウォーター・ゲート〉事件になぞらえて〈ゴスベル・ゲート〉〈天国ゲート〉〈パール・ゲート〉などと呼んで連日報道した。

ことの発端は、P T Lの地元の『シャロット・オブザーバー』紙が、三月にベーカー夫妻が享受するさまざまな特権と寄付金の使用目的のすり替えを暴露したことに始まる。時を同じくして、ジミー・スワガートが、六年前に起こったジム・ベーカーと彼の当時の秘書の情事を暴露して非難した。夫妻は、自分たちがホストをつとめる番組〈P T Lクラブ〉のなかで、罪を犯したことを告白しP T Lを去ることを告げた。彼らの弁護士は、スワガートによるP T Lの乗っ取りだと応戦した。一方、当事者の元秘書が、テレビ・新聞の取材に応じ、この事実を認め口止め料としてP T Lの資金から二六万五〇〇〇ドルを受け取ったことを告白した。夕方6時や深夜のニュース・ショウは連日興味本位に報道を繰り返していった。

スキヤンダル発覚後、P T Lの運営を任されていたジェリー・ファルウェルは、經理の乱脈を指摘、ベーカー夫妻と幹部数人を解雇、告発した。夫のジミーは、八九年、〈ヘリテージUSA〉ほか二四の詐欺陰謀などの罪で有罪を宣告され、禁固四五年罰金

五〇万ドルの刑に服している。彼は最低でも一〇年間は保釈もされないという厳しさである。初犯の詐欺事件としては同じ初犯の殺人事件よりも重いという異常さに一般のテレビ伝道への批判が込められているように思われる。判決と同時に（ヘリテージUSA）は閉鎖された。

ジミー・スワガートのセックス・スキヤンダル

一九八八年二月二日のニュース専門局CNNは再び衝撃的なニュースを伝えた。今度は、ジミー・スワガートが、二一日の彼の番組のなかで不倫の罪を犯したことを告白し辞職したのである。この事件は、未だにベーカー・スキヤンダルから立ち直ることができずにいたテレビ伝道界に追い打ちをかけるものとなった。

彼を嘲る声は多かった。というのも、スワガートはテレビ伝道師の最大の嫌われ者で、他の教派や伝道師をあたりかまわず非難してきた。特に、ベーカー事件のような性的・道德的問題には厳しい審問官を自任していた。

この事件自体が大きな皮肉に覆われている。この事件が暴露された遠因は、彼が同じ教派アッセンブリーズ・オブ・ゴッドの伝道師マーヴィン・ゴーマンの性的過ちを攻撃し、彼の聖職剝奪を要求したことにある。ゴーマンは、彼が悔い改めたにもかかわらず、スワガートが事実を捏造して中傷したために同教派を追われたとして、九〇〇〇万ドルの訴訟を起こしている。彼は復讐のために私立探偵を雇ってスワガートの素行を調査し、彼がニューヨーク近郊外のモートルで売春婦を迎え入れ送り出すところを写真にとったのである。ゴーマンは、この写真をたてにスワガートと交渉したが決裂し、写真を教派本部に送った。この売春婦はテレ

ビ局の取材を受けて、二人の間の関係、たとえば、一年以上続いていること、彼が変装してきたことなどを告白した。こうして今度は、彼が聖職を奪われた。

スワガートの告白の翌日に開かれたルイジアナ地区のアッセンブリーズ・オブ・ゴッドの指導者会議で、彼の悔い改めを評価し、既に決定している海外伝道を除いて、三月間の説教の禁止と聖職者の二年間の監督を受けるいわば（執行猶予）が決定された。そのため彼は、三月間本部のバトンルージュ教会では副牧師に降格せざるをえなくなった。⁽¹⁾

ジェリー・ファルウエルの宗教政治世界からの撤退

ジェリー・ファルウエルは、一九七〇年代後半から保守的な根本主義者の信者たちを連邦議会議員候補者への投票と資金援助に駆り立ててきた。その結晶が一九七九年に設立したモラル・マジョリティーである。モラル・マジョリティーの会員は公称四〇〇万人といわれ、七〇年代半ばのヴェトナム反戦運動と敗戦後のこれまでのアメリカの価値を否定するカウンタート・カルチャーの社会的な潮流に抵抗し、その流れを押し戻す（道徳革命）を標榜していた。彼らの支持する議員たちは、多くは共和党議員でレーガンを支持し、愛のある家庭生活を信奉し、政治的には保守派である。彼は、レーガン大統領のアドヴァイザーの地位にもあった。これまで民主党から共和党へ大統領の座を取り戻すために、選挙の度に先頭にたって支持を訴えてきて、政治に宗教的信念を反映させようと目指してきた彼は、八九年夏、「モラル・マジョリティー」を解散した。過去一〇年間、根本主義者を議会に送り込むという目的を達したというのがその理由である。この年一二月に

はさらに彼の理想とする保守的宗教世界を縮小せざるを得なくなつた。七年間刊行してきた月刊誌『ファンダメンタリス・ジャーナル』を財政的理由で廃刊した。

社会的な批判とテレビ伝道界の対応

ジュエリー・ファルウェルの政治からの撤退は別として、一連のスキヤングルの影響は余りに大きかつた。彼らはどのようにこの試練を乗り越えようとしているのだろうか。

ベーカー・スキヤングルの後、一連の浴びたくない脚光を浴びてテレビ伝道師たちは、二つに割れた。オーラル・ロバーツは、スワガートが「兄弟たちの不和の種を撒いている」と非難し、ベーカーを守るために小切手を送るように信者に訴えた。ロバート・シューラーもベーカー側に立った。こうした仲間同士の中傷合戦は世間をうんざりさせただけだつた。ファルウェルは、見込みのないPTLに愛想づかしをし乗っ取りの噂を避けて、八七年破産に瀕したPTLを去つた。

こうしたなか宗教団体の巨額な収益に注目して、連邦議会の下院で、今まで非営利の宗教団体の非課税扱いの伝道事業に対する寄付金が本来の目的に使われているかを調べる聴聞会が開かれた。これは明らかに、ベーカー・スキヤングルを契機として、テレビ伝道師に対して世間の目が厳しくなつた証であらう。こうした厳しい状況下、全米宗教放送関係者連合(National Religious Broadcasters)は、国税局や連邦通信委員会の厳しい監視を逃れるために、新たな倫理規定を採択した。たとえば、伝道師の家族などが、理事会の多数を占めてはならないこと、などである。さらに、八八年二月、同連合は、ワシントンで開かれた年次総会

で、伝統的な相互不干渉と独立からようやく重い腰を上げ、相互監視機関の設置を決定した。たとえば、財政の公開と会計監査、問題が起こつた際の金の出入額の記録、そして身内の役員でなく外部の者によって管理される理事会の設定などである。この連合には、一三五〇人の会員がいて、オーラル・ロバーツとロバート・シューラーを除くほとんどの伝道師の組織が加盟している。新たにテレビ伝道の先駆者ビリー・グラハムを長老職に任命した。いみじくも彼は彼らの置かれた立場を宣言した。「宗教放送の存在そのものが試されている。われわれが今一番必要としているものは、道徳的高潔さだ!」

五 テレビ伝道の現状

財政的逼迫

テレビ伝道に対する大衆の不满の一つの指針として、八八年二月にウィリアムズバーグ・チャート・ファウンデーションが行つた調査がある。それによれば、アメリカ人の四〇％は、伝道師たちがテレビで献金を集めるのは違法だと考えている。ベーカー・スキヤングル以来の各伝道師の財政の窮乏は依然として増加している。たとえば、八七年の各伝道師たちの現状を見てみると、PTLクラブでは、視聴者からの総収入は、ベーカー夫妻の時の最高の年の九六〇〇万ドルから四一〇〇万ドルに半減した。パット・ロバートソンのCBNの総収入は、八六年の同期に比べて、七カ月間に三二・五％も減少した。この減少の理由のひとつには、この放送局のスターであるパット・ロバートソンが大統領予備選挙に出馬していたことがあげられるかも知れない。ジュエリー・

ファルウェルの収入は、三月から一〇月までで、予想額より六〇〇万ドルも少なかった。ジミー・スワガートとオーラル・ロバーツは、八七年の収入を公表することを拒否しているが、ロバーツの財政状況は良くならないようもない。

視聴者数の飽和状態

これら人気のあるテレビ伝道師たちの番組の視聴率も落ちていく。CNNニュースによれば、スワガートは、四〇万世帯の視聴者を失った。(これは、彼自身のスキヤンダル以前のことである。) ファルウェルの「オールド・タイム・ゴスペル・アワー」も、一〇万世帯減らしている¹⁶⁾。オーラル・ロバーツも、制作コストの上昇と放送を止める局が出てきたことから、テレビ放送を縮小しつつあるという。アービトロンによると、ロバーツの番組「奇跡を求めて」は、前年の献金騒動以来、一五万人以上の視聴者を失い、夏の間だけでも、四〇%も献金が減少した。八七年末当時、同番組は依然として一五〇局以上が放送しているものの、七一局で放送が中止された¹⁷⁾。こうしたなか彼ら自身が危機感を感じたことは数字に表れている。全米宗教放送関係者連合の記録によれば、テレビ局は二二二局から二五九局に、ラジオ局は一三七〇局から一三九三局に、グループで制作する番組数は一〇一〇から一〇六九にそれぞれ増加した¹⁸⁾。また、財政責任伝道師会議(the Evangelical Council for Financial Accountability) は、この一年で一〇〇人の新しい会員を加え、四三〇人に増加し規則を強化した。これは、かつてなかったほどの成長だといえる¹⁹⁾。

しかし彼らの危機は一次的なものではない。テレビ伝道全体に見られる視聴率の全般的低下は、今回の一連のスキヤンダルによ

るだけでなく、七七年をピークにして下降傾向を辿っている²⁰⁾。また、テレビ伝道師の数と番組の数は増え続けているのに対して²¹⁾、視聴者数は近頃横ばい傾向である。既に保守的傾向の視聴者数は飽和状態にあるといえる。

競争の激化と番組のマンネリ化

こうした限られた視聴者を奪いあう競争の激化と共に、内容のマンネリ化と類似化も視聴者数の停滞の一因にあげられよう。テレビ伝道は、その構造上信仰を広めるには視聴者を獲得せねばならず、そのためにテレビの時間枠を買いねばならない。他の番組と異なる魅力ある内容にするには豪華な設備とスタッフが必要となり、ますます資金が必要となり献金を訴えることになる。こうして金を集めること自体が目的化してしまってきている。スワガートによれば、彼がテレビの時間枠を買いなくなれば、何千何万人の人が地獄に落ちることになるといえる²²⁾。

厳しくなった社会

これまで、伝道師たちは、贅沢な生活をするからこそ、信者の憧れと伝道師への信仰の証としてきた。しかし、これもベーカー事件以来変えざるをえなくなってきた。前述したように、国税局による宗教活動の免税措置の見直しは彼らの常識が世間で受け入れられなくなってきたことを示している。それは一九九〇年に連邦最高裁判所判決となって表れた。ジミー・スワガートがカリフォルニア州が通信販売している聖書に売上税をかけるのは政教分離違反であると上告していたが、州の課税は合憲としたのである²³⁾。彼らの金権体質と常識とかけ離れた体質は、スワガート・スキヤンダル後の彼の処分に表れている。三月の伝道禁止は彼の本道教

派への寄付が毎月膨大だからだと報道され、彼への生ぬるい処分は他の教会関係者や一般信者を激怒させている。⁽²⁾

マス・メディアのこうした宗教活動に対して果たす役割も非常に大きい。ベーカー事件が新聞の暴露で始まったように、スキヤンダルが連日テレビで放送されるように、また逆に彼らがそれらを利用してきたように、現代ではメディアは重要な要素となっている。その特徴は、アメリカ社会学会 (Association for the Society of Religion) 会長のローランド・ロバートソンが、「マスメディアは、宗教が少なくともわれわれの見方からは、大衆の決定的な悩みとかなり関連があるようなときでも、その宗教的要素を控え目にしたり、完全に無視する傾向が強い」と語っているように、世俗的なスキヤンダルとして捉える傾向は否定できない。そして、彼らの批判的姿勢は止まない。一九九二年、三大ネットワークの一つであるABC放送の人気ドキュメンタリー番組「ブライムタイム」は、おとり信者を使って、三人の中堅テレビ伝道師の癒しが全くのインチキな詐欺であることを隠しカメラを使って暴露した。さらに献金がないと暮らしていけないほど貧しいといっている彼らが如何に豊かかを、彼らの邸宅の内部写真を手手して暴露した。極め付けは、中米の孤児院への献金やアウシュビッツでの教会建設募金の不正使用を内部資料を入手して厳しく批判した。伝道師たちは、ますます強大になり社会正義の代弁者を自認するジャーナリズムを相手にしなければならぬ。

六 クリントン大統領の誕生とテレビ伝道のゆくえ

——政治の表舞台からの退場——

最後に、民主党クリントン大統領政権の誕生は、今後の彼らにとって重要な意味をもつことになるに違いない。彼らの台頭と隆盛の章で述べたように、彼らは民主党政権をもたらしたアメリカ社会のカウンター・カルチャーによる〈道徳的崩壊〉を批判し、古き良き伝統的な強い男性原理に基づいたアメリカの復活を主張する〈道徳革命〉を旨指して来た。彼らの台頭と隆盛は、まさに国際的にも国内的にも強い自信に満ちた世界の指導者としての強力なアメリカを求める政治的社会的傾向と一体となってきたといってもよい。彼らは彼らの宗教的信念を実現する最短の方法として、宗教的圧力団体を形成し、大統領選を中心として共和党への熱烈な支持を公然と訴えてきた。

しかしアメリカの国内外の情勢は、共和党をもってしても否応なく変わらざるを得なくなってきた。就任一期目はソ連との徹底的な対立姿勢を見せていたレーガン大統領も、世界情勢の大きな変化のなか、核軍縮を含め世界協調の平和主義的姿勢を打出さざるを得なくなってきた。国内的には、カウンター・カルチャー文化は二〇年を経て既に社会的に認知されつつある。同性愛者同士の間婚や法的立場の認知、彼らへの布教伝道の公認、女性の権利と自立への社会の意識の認知、少数者の権利の拡大など、すでにアメリカ社会の中で確固とした権利を得てきている。今回の大統領選挙は、一方では失業や経済問題が争点であったが、宗教的な争点も大きく関わっていた。それは、七〇年代に人権拡大のカウ

ンター・カルチャーの潮流にのって出された連邦最高裁判所の中絶合憲判決が、再び審議され選挙直前にその判決が出されたことだった。共和党候補ブッシュや保守的な宗教団体や根本主義者たちは、判決が覆り女性に中絶権を認めない伝統的価値が再生することを熱望していた。これは女性の位置・役割に関する重大な問題なのである。彼らにとって女性は、家庭を守る存在であって、社会で男性に互して働くべきではないのである。一方民主党候補クリントンや自由主義派の穏健なプロテスタント各派は、女性の固有の権利としての中絶権を認めていた。こうして再び伝統的価値対カウンター・カルチャーの対立の図式が政治の場で緊張をはらんだ。しかし前述したように社会的に認知された女性の権利は、一見保守派の判事が多数を占めて中絶禁止へと覆るかに見えた最高裁判所も覆すことができず、条件付きながら中絶は認められた。アメリカ社会は、伝統的保守派が道徳革命によって簡単にカウンターカルチャーを打ちのめせると考えていた以上に、もう後戻りできないほど大きく変わってしまったことが明らかになったと言えよう。共和党政治と根本主義者たちにはこうした変化が見えていなかったのだろうか。

クリントン政権の誕生は、これまでの変化の波を受けた新しい価値を求めるアメリカ社会の選択だったといえるだろう。争点は内政問題だった。すなわち第二次大戦後最大の、一〇〇人以上の議員の入れ替えがあった。女性議員の数は二〇人近く増えた。閣僚には女性がこれまでになく入閣した。この年、全米各地で新しい風が吹き荒れた。職業政治家の勝手を許さない住民投票は、全国一〇〇件以上に及んだ。オレゴン州では、同性愛の追放法案が

否決され、コロラド州では同性愛を差別する州法を無効とする法案が可決された。メリーランド州では中絶権を認める法案が可決され、アリゾナ州では厳しい中絶規制案が否決された²⁹⁾。

この選挙期間中ずっと、ブッシュ陣営は、両親のそろった家族の重要性といった家族の価値を説き未婚の母親を非難し、家庭崩壊と犯罪と貧困との関連を訴え続けた。彼らの発言は、いまや社会の中枢的な階層になっている新しい価値観をもった中道志向の世代即ちチャッピー（若い世代の都会派のやや保守的な階層）を無用に刺激した。この世代は、政治に大きく関わることを求めないし自分の生活に政治が介入することを嫌うベビーブームの団塊の世代である。彼らは、前回の大統領選では、ブッシュの当選の鍵を握った³⁰⁾。今回彼らは明らかに異なった選択をした。民主党支持だが前回はブッシュに票を入れ、今回はクリントンに投票したものは、実に全投票数の一割に上り、そのうちの五四％がクリントンを支持し、ブッシュ支持は半数の二七％でしかない。また投票動機ではさらに際立った投票者の志向の特徴が見られる。ブッシュ支持者で最も関心の高い順に見ると、外交八六％、家庭重視の価値観六五％、税金五七％、妊娠中絶五五％、財政赤字二六％となつている。これに対してクリントン支持者は、環境七三％、医療保健六七％、教育六〇％、経済・雇用五二％、妊娠中絶三七％となつている。民主党は元来、黒人や社会的少数派の支持は多いので、二位以下の投票動機は理解できるが、環境の七三％は驚異的な関心度合といえよう。これこそ団塊の世代、価値変革をカウンター・カルチャーの中で支持し生き方としてきた世代の関心といえよう。

明らかに時代の風はその向きを変えた。『ニューズウィーク』の言を借りれば、新大統領の誕生は、ある種の再生を意味する。それは希望と復活の瞬間で、第二次大戦を経験した世代が、ついにベビーブーム世代に道を譲ったのである。

国際政治や国内の避けられないさまざまな問題に対処するため、極めて現実的な対応を常に取りつづける政党政治の論理が優先する政治の前に、根本主義者たちの過激で現実的でない〈道徳革命〉と力による支配の政治の実現は無力で無視されて来たのである。党利党略や他の圧力団体との駆け引きや国際政治の政治戦略は、宗教的理念や理想を無視し駆逐した。ジェリー・ファルウェルの主宰するモラル・マジオリティの解散は、現実の政治に対する宗教の無力さの表れといえるだろう。実際、政治家や政党は、時代や支持者の風向きに敏感で、政治的主張も変わる。たとえば、こうした時代の変化に気付いた共和党は、大統領選敗戦後、党再建のため中道・穏健派が新組織を結成した。排他的な印象を与える人工妊娠中絶絶対禁止の宗教右派が党の主導権を握ることを嫌い、より穏健な寛容な保守主義によって次期大統領選を戦うためだといえる。

保守的な力の時代を謳歌していたテレビ伝道師たちは、再び社会体制や文化を批判する少数派の代弁者となっていくのだろうか。宗教と政治は、彼らにとって相いれないものであった。アメリカ国民の変化の希求はいつまで続くかは明らかではないが、保守的な社会的政治動向とともに栄華を満喫してきたテレビ伝道の厳しい冬の時代の到来はキリギリスには辛いものとなるだろう。

註

(1) 「衛星使って予備校授業」『朝日新聞』一九八八年三月一日。

(2) 生駒孝彰『ブラウン管の神々』ヨルダン社、一九八九年、二〇六〜二五頁。たとえば、カトリックではEWTN、CTN、南部バプテスト教会ではACTSが放送を開始している。

(3) 前掲書。

(4) 生駒 前掲書 七六〜八八頁。

(5) グレース・ハルセル、越知道雄訳『核戦争を待望する人びと 聖書根本主義派潜入記』朝日新聞社 一九八九。

(6) "Unholy Row." TIME. April 16, 1987 pp. 60-67, "God and Money." Newsweek April 6, 1987 pp. 28-34.

(7) 前掲Newsweek pp. 38. 前回のキリストの降臨については「道路標識のような「飛び出し注意! 九〇〇フィートのキリストが出没」というポスターが現れたりした。また、今回の献金については、TIME January 26, 1987, pp. 37, March 2, 1987, pp. 45. や新聞各紙で続々と報道された。

(8) "PTL attorney says Swagart behind ouster, takeover try." Santa Barbara News Press. March 25, 1987.

(9) 「宗教に関する最近のアメリカの判例あれこれ」『国際宗教ニュース』一九八九年一月第一号 二五〜二六頁。

(10) "God and Money." Newsweek April 6, 1987, pp. 29.

(11) "Now It's Jimmy's Turn." TIME March 7, 1988, pp.

(12) 『クリスチャン・センチュリー』の選んだ八九年アメリカ

宗教界一〇大ニュース』『国際宗教ニュース』一九九〇年三月 第一四号 六頁。

(13) “God and Money.” Newsweek April 6, 1987, pp. 29.

“Now It's Jimmy's Turn.” TIME March 7, 1988, pp. 47.

(14) 「宗教ビジネスの巨額な収益にメス」『ニューズウィーク』

日本語版、一九八七年九月一〇日号。

(15) “Clean Up Their Act.” TIME February 15, 1988, pp. 47.

(16) Ibid. pp. 47.

(17) “Oral Roberts Cut Back.” Christian Century February

2-10 1988, pp. 105.

(18) “Clean Up Their Act.” TIME February 15, 1988, pp. 47.

(19) Oral Roberts Cut Back.” Christian Century February

2-10, 1988, pp. 105.

(20) 石井研士「アメリカにおける宗教テレビの現状」『宗教研

究』第二六九号二五四頁。

(21) 生駒 前掲書 一八〇—一八二頁。

(22) “God and Money.” Newsweek April 6, 1987, pp. 29.

(23) Ibid. Newsweek April 6, 1987, pp. 34.

(24) 「宗教団体の宗教出版物販売に対する課税は合憲——テレ

ビ伝道師スワガードの訴え却不」『国際宗教ニュース』一九

九〇年五月 第一五号 一三頁。

(25) “Now It's Jimmy's Turn.” TIME March 7, 1988, pp.

48.

(26) Robertson, Rolland, “President Report.” News & An-

nouncements Vol. 22 #1.

(27) 「議会にも「変革」の兆し」『ニューズウィーク』日本版

一九九二年一月一九日号 一九頁。

(28) フィリップ・ハモンド、武田道生訳「80年代アメリカの大統領選を巡る政治と宗教——道徳革命を目指す原理主義の

反攻」『国際宗教ニュース』一九八九年五月 第九号。

この論文は、八〇年代の大統領選挙を七〇年代からクロニク

ルに比較検討し、宗教の果たしてきた道を、アメリカ文化史

の中からとらえるが、九二年の中道移行というカウンターカー

ルチャー世代の台頭と宗教右派の無力化を見事なまでに予見

している。

(29) 「ここにも新しい風が」『ニューズウィーク』日本版 一九

九二年一月一九日号 二〇頁。

(30) 「そしてアメリカは変わった」『ニューズウィーク』日本版

一九九二年一月一九日号 七二頁。

(31) フィリップ・ハモンド 前掲論文 八頁。

(32) 「米共和党 穏健派が新組織 宗教右派の主導権を嫌う」

『朝日新聞』一九九二年二月一六日。

(33) なお、本論文は、一九八八年までのアメリカにおけるテレ

ビ伝道の分析を纏めた、拙稿「電波によって創造された神々の

試練」『法然学会論叢』第六号 法然学会 一九八八年、

をもとに、その後のアメリカの政治の新たな動向と伝道界の

変化を追って加筆修正し分析を加えたものである。

(たけだ みちお・宗教学)